倫理的多元主義による経済倫理教育論

―論理と内容構成―

猪 瀬 武 則†

A Lesson Plan for Including Ethics in Economics Education Based on Ethical Pluralism:

The Logic and Curriculum

Takenori Inose

Economics courses typically exclude any discussion of values and value judgments. This is most likely due to the notion that economics is a science, and science does not depend on one's values. However, this point of view has been disproved by Sen and Putnam. Ethical issues are frequently encountered in economics and economics educational curricula should cover this topic, since students will face difficult choices in understanding various economic scandals as well as when learning about subjects such as poverty and inequality. In this paper, I propose a lesson plan focused on providing ethical content in economics education, based on ethical pluralism. The paper is summarized as follows:

First, I develop a lesson plan for including ethics in economic education, focusing on ethical pluralism. Second, the lesson plan is organized by active-learning. Third, a teaching method is constructed using a four-step process for ethical decision-making.

はじめに

本稿は，倫理的多元主義による経済教育のカリキュラム構想を論じるものである。

既に筆者は，経済倫理教育の目標・内容・方法に亘る議論を展開してきた。そこでは，目標や編成原理を多元主義に求める可能性について論じ，経済学の倫理的基盤を学ぶ論理と内容分析を試み，経済倫理に関する正徳善の三元鼎立理論を考察した。さらに，経済教育での実践上の課題である事実と価値の二元論批判を試み，断片的ではあるが，経済教育における倫理的内容の扱いを論じてきた[1]。それらとの重複を避けるために，本稿では，カリキュラム構成と内容開発に焦点をあてる。

経済教育における倫理の扱いについて，その契機となったのは山岡道男教授との金融経済リテラシーの調査発表（Inose and Yamaoka 2008）であった。2008 年にエストニアで開催された国際学会 IACSEE（International Association for Citizenship, Social, and Economics Education）で，英国 Bath Spa University のハワード・ギブソン（Howard Gibson）は，我々の発表に「倫理的側面」への疑義を質したのである。山岡教授は即座に CEE が当時刊行予定であったジョナサン・ワイト（Jonathan Wight）の『経済学を教えるための倫理的基礎付け』（Wight and Morton 2007）による対応を示唆し

† 日本体育大学児童スポーツ学部教授

た[2]。教材分析「経済教育は『在り方生き方』に答えることが出来るか？」（猪瀬 2008）は，それに基づいており，その著書は，山岡教授が主宰した「経済と倫理教育研究会」によって，その全訳が試みられた。版権の問題で刊行は断念せざるを得なかったことは残念なことであった。

したがって，本稿は 2000 年代から筆者が断片的に発表してきた経済倫理問題をふまえながらも，山岡教授からの示唆を受けて，経済倫理教育に答えようとしたものである。本稿で展開する原理は，「倫理的多元主義」であり，その枠組みを示し，カリキュラム概要とその主要概念に基づく教材構成を提示することとしたい。そのため，世界的視野で経済倫理を追究した塩野谷祐一の三元鼎立理論については既に論じており（猪瀬 2009），ここでは論じない。なお筆者は，多元主義経済教育論として，多元主義を論じている（猪瀬 2017）が，そこでの議論は，新古典派などに制度化・一元化される現状に対して，多様な経済学の併存を許容する必要性を論じたものであり，本稿での倫理的多元主義とは異なるものである。

1. 経済倫理教育の意義―事実と価値の二元論を排す

経済教育で価値や倫理を扱うことは，冒頭に申し述べたとおり，忌避される。それは，実証的な事実の解明と「主観的」な価値判断は峻別しなくてはならないという「事実と価値」の二元論に基づいている。まさに，経済学の前提であるライオネル・ロビンズ（Lionel Robbins）の「事実と価値」の二分法，そして，経済「科学」からの価値判断の排除の課題である（Robbins 1935）。そのため，経済教育で倫理を扱おうとすれば，事実と価値の混同，「教育」ゆえの「科学」からの逸脱，あるいは価値の注入・教化という批判や危惧がつきまとう。

しかしながら，これらの批判や危惧は虚妄，誤認であり，アマルティア・セン（Amartya Sen, 2002, 2008）をはじめとして多くの批判や反論がなされてきた。また，存在から当為を導き出そうとする誤りとしての自然主義的誤謬の問題と共に，事実と価値の二元論への反駁は，ヒラリー・パットナム（Putnam 2002）をはじめとした批判もなされ，セン自身もそれを参照しつつ，自説を補強している。

改めて経済教育の文脈では，どのように論じられてきただろうか。米国経済教育協議会の合意は，規範経済学では価値や価値判断を扱い，実証経済学で事実を扱うというものである。米国経済教育のバイブルともいえる『経済教育内容のフレームワーク』（Saunders et al. 1984）では，次のように記述されている。

> 分析（何が生じているのか）と価値判断（何が生じるべきなのか）の区別を誤ることは，多くの経済問題についての議論に多くの混乱が生ずる原因である。しばしば，「実証的経済学」と呼ばれる第 1 のアプローチは，経済がいかに動いているかを理解することを目的としている。原理的には，実証的経済学の説明についての論争は，事実と証拠によって解決されうる。しばしば「規範的経済学」と呼ばれている第 2 のアプローチは，経済およびそのある部分がいかに動くべきかを扱う。規範的経済学は，客観的なデータと照合することで，その説が正しいとか誤っているとかいうことはできない。実証的経済学は，経済論争を解決するのに大いに役立つことができる。しかしながら，経済政策に関する多くの問題点は，規範的な価値の相違を調和させることにかかわっているのである。規範的な問題に対しては，人びとは自分の能力を適用して，自分自身の価

値観に基づいた合理的な決定をしなければならないのである。（邦訳 p. 17）

分析と価値判断の混同を戒め，事実を実証経済学，規範を規範経済学が扱うものの，その正誤は問えず，一方，実証経済学は経済論争に役立つものの，価値判断は，それぞれの価値観に基づくとする。まさに，事実と価値の二元論に基づいた経済学の基本的立場を表明している。こうした前提は，先に述べたとおり，パットナムによって論駁され，センの批判の基盤となった。すなわち，「認識的価値」（Putnam 2006, 邦訳 pp. 32–36）と「倫理的価値」（pp. 34–43）に基づいた事実の記述である。前者は，「首尾一貫性」「尤もらしさ」「妥当性」「単純」などの価値に基づいて，理論が選択されるというわけである。後者は，「残酷な」（pp. 39–52）という言葉に代表される「事実の記述」自体にある価値判断であり，その言葉による叙述は，記述と共に評価がなされていることが分かる。歴史的になされた中世の「残酷な君主」の記述的意味と規範的目的をもって「残酷」が使われることも事実だとする（p. 40）のであり，価値判断から離れた記述の困難性が了解されよう。

以上のことから，経済教育が，純粋な「科学」としての経済学を内容として構成することは困難であることが明らかである。構成や教授にあたっては，むしろ，概念や内部に含まれ，埋め込まれている価値概念をあぶり出すことによって構成すること，さらに，カール・グンナー・ミュールダール（Myrdal 1996; 1944）の価値前提の明示を，内容開発上，さらに学習者の探究上の指針とすべきことが確認される。

こうした点について，社会科教育では価値判断指導として，価値明確化，価値分析が重要であることが論じられてきた。社会認識教育（記述科学であれマルクス経済学であれ）では，事実と価値の二元論による「価値への禁欲」が前提であったものの，児玉（1977）の社会的判断力育成におけるミュールダールの価値前提の明示がふれられ，中野（1978）のウェーバーの価値自由の解釈によって，自らの価値的立場を明示することによる価値判断指導の可能性を主導したのであり，本稿でもこれらを踏襲することとする。

2. 編成原理としての倫理的多元主義

2.1 倫理的多元主義の意義

経済教育の編成原理として倫理的多元主義を導入する上で，倫理学を基盤とするのか，経済学を基盤とするのかという問いが生まれる。「経済倫理」と称した場合の英訳は多くの場合，Economic Ethics である。本稿では，その立場は取らない。Economic Ethics ではなく，Ethical content and thoughts in Economics であるということに留意したい。すなわち，経済倫理学ではなく，経済学での倫理的内容・考え方をいかに扱うかに焦点がある。したがって，経済の倫理学ではなく，経済学の中での倫理の扱いである。そのため，現状の多様な経済学をふまえつつも，倫理的側面に焦点化するものである。その点では，冒頭に述べた多元主義経済教育論（猪瀬 2017）と同様に，経済学を基盤とした経済教育であることに変わりはない。

以上の観点から，経済学が前提とする功利主義・帰結主義で包摂し得ない多様な倫理的，価値的見方考え方を編成する原理として，倫理的多元主義を設定するのである。倫理的多元主義は，重層する現実に関連させて，単一の価値や原理に還元できない複数の価値や原理を許容する立場である。

この倫理的多元主義を構成する上で，アイザイア・バーリン（Berlin 1953）の価値的多元主義を参照する。バーリンの価値的多元主義では，多くの場合，多元主義に対して両立不可能性（incompatibility）と共約不可能性（incommensurability）が課題となり，批判の対象となる。両立不可能性とは，人はあらゆる価値や理想を両立させることは原理的にできないため，ぶつかり合う要求は両立できないか，または両立したとしても必ず「損失（loss）」を伴うことになるということである。一方を追求すれば他を犠牲にせざるを得ない関係（トレードオフ）でもある。共約不可能性は，トマス・クーン（Thomas S. Kuhn）の文脈で人口に膾炙した科学論上の見方である。それを価値論・倫理学にも当て嵌め，二つの異なる価値や二つの異なる帰結は共通に図ることができないというもので，これは経済学の原理ともいえる功利主義の計測性への批判にもなる。以上の多元主義に立つことにより，これまで帰結主義，功利主義のみに立って構成されがちな経済教育は，多元的なアプローチを可能にする。すなわち，現在的な倫理の枠組みとしての義務論，徳倫理を含めた構成が可能となる。

多元主義経済教育の価値的フレームワークは，帰結主義・義務論・徳倫理であり，この三つの価値及び原理をワイト（Wight 2015）は，構成上，二つの側面からとらえることができるとする。すなわち，その領域を横断する理論分岐と領域に内在する理論分岐として，垂直的多元主義と水平的多元主義を設定する。本来，拮抗するはずの三つの原理は，これによって鼎立，並立し，経済（倫理）教育論として成立する。

垂直的多元主義では，これら三つが，第一に「徳あるもの」が，第二に「義務や規則」に従った行動をすることによって，第三に「より良い結果」がもたらされるとする三つの関係としてとらえられるものである。徳倫理にある「徳ある人」からはじまる，ルールに則った行為によって，帰結が善なるものとなるというもので，これらは一連の連関を持ったものとなる。

一方，水平的多元主義では，それぞれ多様なフレームワークの内部に存在するものとしてとらえ，徳倫理の文脈では，アダム・スミス，アリストテレス，孔子，ブッダなどからの正直という内面的徳の由来をとらえるのである。同様に，義務論の文脈では，十戒・カント的純粋理性・自然権論に基づくとらえ方をする。帰結主義倫理では，公共政策を評価する上での多元的目標をとらえる。すなわち功利主義は，幸福の総量に焦点をあて，それを基軸とする新古典派経済学では，消費者選好の極大化に焦点をあてる。しかしながら，それによってなされることは，人命救助，国家安全保障，自由，公正，動的効率性でもあり，単純ではない（Wight 2015: 225）。

それではその具体を，ワイトの論理に則って説明する。

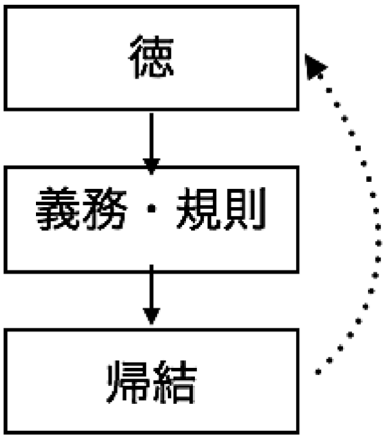

図 1　垂直的多元主義の次元

（出典：Wight, J.,（2015）*Ethics in Economics: An Introduction to Moral Frameworks*, Stanford University Press, p. 211.）

2.2　倫理的多元主義の二側面とフレームワーク

前項で，倫理的多元主義の二側面に言及した。第一に，垂直的多元主義であり，それは，領域を横断する理論分岐である。第二に，水平的多

徳倫理

アダム・スミス⇔アリストテレス⇔孔子⇔ブッダ

義務論

十戒⇔カント的純粋理性⇔自然権論

帰結主義

功利主義⇔新古典派経済学⇔多元的目標

図 2　水平的多元主義の次元

（出典：Wight, J.,（2015）*Ethics in Economics: An Introduction to Moral Frameworks*, Stanford University Press, p. 213.）

元主義であり，領域に内在する理論分岐である。

垂直的多元主義では，「徳あるもの」（徳倫理）が，「義務や規則」（義務論）に従った行動をすることによって，「より良い結果」（帰結主義）がもたらされるという連関を持つ。したがって，経済問題などを扱う際に，この三つの倫理的立場は連関しつつ，循環するかの如き関係性を持つこととなる（Wight 2015, pp. 210–211）。

一方，水平的多元主義では，多様なフレームワークの内部に存在するものとして，それぞれ個別に成立し，その内部での歴史的・普遍的考え方を枠組みとして鼎立させる。たとえば，徳倫理では，正直という内面的徳の由来を探れば，アダム・スミス，アリストテレス，孔子，ブッダなどがそれにあたる。その関係性は，図 2 のとおりである。

水平的多元主義の倫理的フレームワークでは，帰結主義が経済学における，そして経済教育における重要な要素を占めていることが明らかだ。なにより，帰結主義は，公共政策を評価する多元的目標を設定できるからだ。功利主義は最大多数の最大幸福原理で，幸福の総量を問題とする。新古典派経済学の前提が，消費者選好の極大化にあるように，数量還元が政策評価でもっとも「見える化」しやすいものだ。さらに，トロッコ問題で帰結主義が唯一，答えを出すことが出来るように（その妥当性についての異論と議論は棚上げした上で），多元的目標としての人命救助，国家安全保障，自由，公正，動的効率性などの問題に，帰結主義は経済学内容，経済教育内容上，答えることが出来るのだ。

もちろん，義務論（義務，動機，定言命法，規則）を背景とするジョン・ロールズ（Rawls 1999）の格差原理をはじめとした知見を位置付けることも必要である。さらに，徳倫理での徳＝アレテーとエウダイモニア（幸福）を基軸とした思想を基盤とし，市場主義を批判するマイケル・サンデル（Sandel 2012）と法における感情の定位を図るマーサ・ヌスバウム（Martha Nussbaum）（Nussbaum 1993）などからの知見も経済教育内容に位置付ける必要がある。特に徳倫理による経済学を展開する大垣（2011）の徳倫理による経済学からの構成も可能であり，その模索も重ねなければならない。

3.　目標・内容・方法

3.1　目標

3.1.1　経済倫理教育の目標

経済教育の目標は，経済的市民性であり，その概要は示している（猪瀬 2005）。これらは前提としつつも，改めて経済倫理教育の内容的側面の目標に，倫理的多元主義に基づき効率性基準や経済制度

の中に倫理的基準を付加すべきであることを提案する。

ここでは，ワイトの提示した CEE の内容基準への倫理的内容修正案を参照したい。彼は，CEE の内容基準には倫理的基礎付けが不十分であり，倫理的概念を付加することにより，豊かな内容基準となるとする（Wight 2016: no. 4126–4127）。具体的には，内容基準 2「意思決定」と内容基準 10「制度」であり，次のような加筆を加えている。太字が加筆修正部分である。

基準 2

実効性のある意思決定は，もう一つの選択をする際に，**義務，規則，権利を，はじめに十分に配慮した上で**，さらにかかる費用とそこから得られる利益を比較することである。多くの選択では，目標の選択と分析のフレームワークに，**道徳的配慮を要件**とする。評価の基準は，限界分析，費用便益分析，効用極大化，利潤極大化，**非帰結主義的倫理的フレームワーク**である。

基準 10

制度は，市場経済の中で，個人と集団に，目標を達成させることを支援するように進化する。**倫理的行為や期待される義務に関連する社会的基準は重要な制度もしくはゲームのルールの例である**。これらの制度は，市場経済にとって，所有権を確保し，**社会的連帯**の特質を生み出す。

ワイトの意図は明確で，基準 2 では，意思決定モデルに，「義務，規則，権利への配慮」を加えることによって，効率性基準としての限界分析，費用便益分析，効用極大化，利潤極大化以外の，「非帰結主義的倫理的フレームワーク」を加味しようとするものである。また，基準 10 での制度とその進化に関して，「倫理的行為」「義務に関連する社会的基準」が，市場（ゲーム）における重要なルールであり，それが進化をもたらすということを内容基準として企図する。したがって，市場経済に必要なものとして，従来の所有権のみならず，「社会的連帯」を特質として重視するのである。

3.1.2　教材構成上の目標

教材構成上の目標として，次の二点を提示する。第一に，内容として経済概念と倫理概念の理解を目標とする。経済概念は，主に，静的・動的効率性であり，市場の失敗の中での情報の非対称性，モラルハザード，逆選択である。次に，倫理概念では，帰結主義，徳倫理，義務論に関連する諸概念である。

第二に，方法的目標として経済倫理的意思決定をあげる。猪瀬（2002）はかつて，実践的意思決定としてこれを定式化している。ここでは，意思決定の二重過程を意識的な学習活動での対象化を図る過程としての組み込みを想定している。この二重過程は行動経済学のダニエル・カーネマン（Kahneman 2011）により人口に膾炙したもので，バイアスやヒューリスティックスの多くは，自動的で，処理が速く，しかし不正確なものである（システム 1）。一方，言語的思考や計算などを使う，より精緻な処理過程があり，その処理には大いなる負荷がかかり，また時間を要するが，その意思決定は正確なものとなる（システム 2）。

こうした二つのシステムは，キース・スタノビッチ（Stanovich 2004）が，それらを統合して「二重過程（double-process）モデル」として提示していた。それは認知科学，認知心理学のもので，処理は速いが不正確な過程と，正確だが処理が遅い過程という仮説である。その過程に感情や知性，行

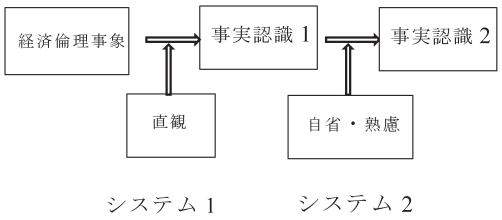

図 3　二重過程をふまえた倫理的意思決定（筆者作成）

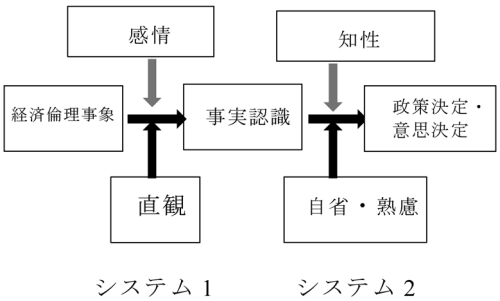

図 4　二重過程をふまえた省察（筆者作成）

動を含めたのである。この二重過程をふまえた省察を，多元主義に基づく価値明確化，価値分析の場面で設定するのである。このプロセスを図解したものが，図 3 と図 4 である。

3.2　内容構成―倫理的多元主義の導入

3.2.1　内容構成の基盤

目標でも述べたとおり，経済学内容としては，情報の非対称性（モラルハザード，逆選択）と効率（パレート基準，カルドア＝ヒックス基準，シトフスキー基準）を設定する。当然のことながら，この経済概念，すなわち効率性がパレート基準をはじめとした新古典派経済学の基盤を踏襲するものであり，功利主義・帰結主義を前提とした構成ではないかという根本的批判が起こり得る。

たしかに，前章までに，倫理的多元主義をとることによって，帰結主義のみならず，義務論，徳倫理からも構成すべきことを述べた。しかしながら，効率や情報の非対称性（市場の失敗）は，内在する価値としての功利主義・帰結主義イデオロギーを教化しようとするものではなく，内在する価値の批判も含めた学習対象として勘案すべき基準として提起するものである。大垣（2011）にあるとおり，経済学の基盤に立ちつつも，徳倫理の「愛」から，これらの効率性基準を相対化することも可能だからだ。もちろん，昨年逝去された大瀧（2013）の指摘にあるように，功利主義・帰結主義の立場から効率を善のみならず，正義から定義する考え方もあり得る。

したがって，倫理の基盤的内容としては，帰結的な厚生向上を第一にあげる。この厚生の向上とは，一般に，生活水準の向上，暮らし向きの善さの改善である。まさに功利主義の最大多数の最大幸福であり，この基準そのものは，素朴な認識として生徒に受け入れられ易い。もちろん，用法として誤認されがちな「情けは人のためならず」，すなわち，人に親切にすれば，相手のためだけなく，やがてはよい報いとなって自分にもどってくる，という「功利性」である。映画『Pay forward』[3] にある「人から受けた厚意（親切）を，次へ渡す」ものとしても確認されるものだ。

一方，義務論からはロールズらの権利に基づく正義があげられる。日本での日常認識は「正義」を大上段に構えるのは，戯画的なヒーローを想定させ，面はゆいか，フィクションとしての偽善性すら想起させかねないものである。正義の重要性の認識とそれを対象化することの難しさがある。ここでは，「権利」に基づくという考え方によって，正義を基礎付ける点で，合理性をもたらすと考えられる。ややもすると抽象的になりがちな正義は，権利に基づく点で具体的で個別的で一方で普遍的なものであることが再認される。

表 1　領域と徳の一覧

領域	徳
1.　重大な損害，とくに死の恐怖	勇気
2.　肉体的欲望とその快楽	節度
3.　限りある資源の配分	正義
4.　他者が問題となる場合の自分の個人資産の管理	気前の良さ
5.　もてなしが問題となる場合の自分の個人資産の管理	手厚いもてなし
6.　自分自身の価値に関する態度と行為	魂の大きさ
7.　侮辱と損害に対する態度	穏和さ
8.「つきあい，ともに暮らすこと，言葉と行為における仲間づきあい」 （a）話における真実の尊重 （b）娯楽的種類の社交的つきあい （c）より一般的な社交的つきあい	 誠実 機知（粗野や不作法や野暮ったさと対比される） 無名，だが一種の親しみやすさ（怒りっぽさや気むずかしさと対比される）
9.　他者の幸運と不運に対する態度	当を得た判断（嫉妬深さや意地悪等と対比される）
10.　知的生活	種々の知的徳（洞察力，知識等々）
11.　自分の生活と品行の計画	実践的知恵

（出典：Nussbaum, Martha C.,（1993）“Non-Relative Virtues: An Aristotelian Approach” in Nussbaum, M. C. and A. Sen,（eds.）*The Quality of Life*, Oxford, 242–269.（邦訳：ヌスバウム，M., 渡辺邦夫訳（2015）「相対的ではない徳――アリストテレス的アプローチ」，加藤尚武・児玉聡（監訳）『徳倫理学基本論文集』，勁草書房，p. 112.）

最後に，徳倫理である。アラスデア・マッキンタイヤー（Alasdair MacIntyre）を嚆矢とするが，その要点は，フィリッパ・フット（Foot 1977, p. 52）の「行為」以上に「徳ある人」の「その人のあり方」（動機，感情，意志）である。高等学校公民科学習指導要領にある「在り方生き方」にあるように，これもまた，生徒にとって，困難な課題である。そこで重視する誠実，廉直，配慮，勇気，忠誠などは，道徳教育として忌避されがちな徳目と認知されているからだ。したがってこれもまた，実質化する上での注意深い構成が必要である。徳目の教化である限り，「道徳の時間」に見られると同様の困難をもたらすからだ。また，エウダイモニア（幸福）も，いわゆる，帰結主義・功利主義での効用や厚生と単純に同様のものではなく，同じ文脈で論じることも難しい。とはいえ，経済教育にとって有用と思われるのは，マーサ・ヌスバウム（Nussbaum 1993, 邦訳 p. 112）が，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』（第二巻七章）から示した領域と徳の一覧である。相対主義者を批判し，多種多様な社会の全てに規範的に働く徳のリストを，「徳の領域」として提示している。表 1 がそれである。特に，具体的な領域において経済教育として注目すべきは，「限りある資源の配分」を正義とする部分である。アリストテレスの配分的正義を論じる部分であろうが，これを「稀少性」としてとらえるのではなく，その稀少性を徳倫理では，「正義」の徳を顕す場面である「授業場面」の設定が可能である。

なお，徳倫理からの経済教育内容構成について，「リチャード・ヘアらの規則功利主義によって義務論と徳倫理は包摂されるか」，「リバタリアン・パターナリズムをふまえた徳倫理構成（大垣構想の実体化）」などの課題は，別稿で論じることとしたい。

表 2　倫理的多元主義による経済倫理教育のカリキュラム（筆者構成）

単元	単元名	内容の概要
1	経済に倫理は必要か？紙に包まれたお金―商取引の道徳性	商行為での差別と道徳性から市場や経済に埋め込まれた経済倫理の契機を考察させる。倫理的多元主義を前提とした三つの事例（正徳善）…従来の経済学のよって立つ善（功利主義・帰結主義・最大多数の最大幸福）と正義・徳の実現による経済社会の構成
2	コンサートチケットの転売問題	コンサートチケットの転売に反対する音楽家の広告から起こった経済学者・大竹文雄と「やまもといちろう」の論争。行動経済学（贈与交換ゲーム）…市場での解決・限界，互恵的利他主義，プリンストン大学教授のアラン・クルーガーの提案，超過需要，転売価格
3	情けは人のためならず（功利か義務か，在り方か？）	映画『ペイフォワード』から「情けは人のためならず」を考えさせ，市場の基盤，利己性と私益の区別，互恵的利他主義，賢明なる利己心，賢慮など特性への考察，市場機構の効率性に果たす倫理の役割（規律，正直，寛容，協力）
4	どこまで保険は可能か？肺ガン治療薬オプジーボが投げかけたもの	癌治療の特効薬が保険適用で一人に年間 3500 万。保険破綻の予想と命に予算制限をできるのか。効率性と衡平性。静的効率・動的効率，格差原理，社会的厚生関数。
5	患者と医者の「情報の非対称ゲーム」…モラルハザードの本当の意味	患者と医者の情報の非対称性ゲーム…アローの提示の問題をゲーム化することにより，医者の濃厚診療による過剰支出を問わせる。医療福祉の経済倫理の中に，情報の非対称性，モラルハザード，逆選択などの倫理的選択場面で，自己の保持する価値からどのように選択させるか
6	「スウェットショップ（低賃金長時間労働の現場）」について何をすべきか？	開発経済の倫理学（開発経済学）…バナナ農園，紅茶・コーヒー農園，繊維・縫製工場の労働現場と動機説，結果説，美徳説に工場を分け，発展途上国の経済発展と人々の豊かな暮らし（経済とエウダイモニア）を，自分たちの生き方在り方を勘案しつつ二重過程をふまえた省察をさせる。
7	企業の社会的責任はどこまでか？	企業倫理と労働経済学（行動経済学）…ミルトン・フリードマンの主張（企業目的の利潤性）へ，具体的な企業不祥事の事例（東芝，日産）から，各ステークホルダーとなって手紙を書かせ，全体討論。情報の非対称性，不完備契約でのモラルハザードと相互応報性，（情報の非対称性に信認義務で答える＝フリードマン自体が倫理を求めていた？）…徳倫理と規則功利主義による接近
8	寄付は発展途上国の産業を破壊するか？	「ボバティ・インク–あなたの寄付の不都合な真実」から寄付による NGO の援助が，発展途上国の産業を破壊し，自立を困難にする事例から。16 万円を浪費家の友人に貸すかという事例，ピーターシンガーの援助義務と効果的利他主義を巡って，先のボバティ・インク（援助が発展途上国の産業を破壊する）とを比し，功利主義・義務論の連合と徳倫理の在り方から，選択。
9	ふるさと納税とパナマ文書の深淵	ふるさと納税の理念と寄付の理念，高所得者のタックスヘイブン活用，多国籍企業の合法的法人税納付などから，納税と所得再分配，資源配分を巡っての議論。規則功利主義者の悲哀，分配か分かち合いか，搾取かフリーライダーか。先の効果的利他主義に対して，所得分配の効率性を考えさせ，不効率・非効率，パレート効率，カルドア＝ヒックス基準，補償原理から，その妥当性を検討させる。
10	格差をどう捉えるか	正義と平等…ロールズの正義論（功利主義批判，権利義務論，無知のベールから結果の平等への視点を開示，格差原理，負荷なき個人，功利主義者は誰かを救い，誰かは救わないのか？）と課税・資産課税による是正政策の可否（ピケティのグローバル資産課税と累進課税。ロバート・フランクの累進消費税。フリードマンの負の所得税などの知見）から，課税の倫理的基盤を厚生主義か徳倫理のエウダイモニアかで考察検討させる

3.2.2　単元構成と概要

単元構成を表 2 に示した。計 10 単元であり，医療，保険などの福祉問題，開発経済の問題など，経済倫理問題が内包され，ただちに論争問題として認識される課題を対象とした。

この構成において配慮した点を 3 点あげる。第一に，これまで論じてきた英米の経済倫理事象を日

表 3　方法構成―活動による原理習得と現実社会への適用

単元	単元名	方法手段	教材契機	原理の展開	教授段階	
1	経済に倫理は必要か？紙に包まれたお金―商取引の道徳性	アクティビティ	・映画「天城越え」での商人が包んだお金（歴史的差別と功利主義が持つ人権と平等性） ・クリーニングのズボンに 1 万円，タクシーに置き忘れた 1000 万円，ネコババか届けるか（誠実と正直，商行為の持続性と倫理性） ・敗戦後の社会科学習指導要領に盛り込まれた商人の分…正・善・徳）	情報の非対称性をもつ商行為における，垂直的多元価値（正徳善）の勘案	導入	経済行動の倫理性（対象化）
2	コンサートチケットの転売問題	ゲーミング，読み物教材	「私たちは音楽の未来を奪うチケットの高額転売に反対します」の意見広告，（経済学者・大竹文雄と「やまもといちろう」の論争）贈与交換ゲーム	市場の可能性と限界，経済行動原理への考察	原理習得とモデル批判	経済原理と倫理性
3	情けは人のためならず（功利か義務か，在り方か？）	映画と読み物教材	映画『ペイフォワード』と「情けは人のためならず」の読み物教材から	経済行動原理への考察		
4	どこまで保険は可能か？肺がん治療薬オプジーボが投げかけたもの	読み物教材	市場機構の効率性に果たす倫理の役割（規律，正直，寛容，協力）	倫理的行動原理への考察		二重過程による価値のあぶり出し
5	患者と医者の「情報の非対称ゲーム」モラルハザードの本当の意味	ゲーミング	濃厚診療で過剰な利益を上げられる医者と患者によるゲーム	行動経済学と二重過程による意思決定の自己対象化		
6	「スウェットショップ（低賃金長時間労働の現場）」について何をすべきか？	動画と読み物教材，ロールプレイング	・発展途上国のバナナ農園などの映画・動画 ・動機説，結果説，美徳説に工場を分けるゲーミング	開発経済	応用とモデル創出	現実の課題，政策問題への対処
7	企業の社会的責任はどこまでか？	動画と読み物教材	日本企業の不祥事の動画 新聞記事	企業倫理		
8	寄付は発展途上国の産業を破壊するか？	映画視聴とロールプレイ	・パナマ文書タックスヘイブンの新聞記事 ・映画『ポバティ・インク』	水平的多元主義・・功利主義による寄付効果性と義務論の「義務性」「権利」と徳倫理の在り方		
9	ふるさと納税とパナマ文書の深淵	アクティビティと読み物	贈与，市場の道徳性の読み物	効率性基準（パレート，カルドア＝ヒックス）の吟味，累進性の吟味		
10	格差をどう捉えるか	ゲーミング，読み物教材	無知のベールから結果の平等への視点を開示，フランクファートの不平等論から	ロールズの正義論と徳倫理からの経済学批判，二層功利主義の反論による新たなるモデルの創出		経済問題の帰結

本の文脈に当て嵌めた点である。単元 1 は，日本的文脈の中で通用する経済事例，経済文化事例を活用したことである。たとえば，松本清張原作の『天城越え』の商取引に関連する象徴的場面を活用している。また，企業倫理に関してもエンロンなどの米国事例とは異なる日本企業の不祥事とその構造的背景を扱っている。第二に，現代的事例や文脈を活かした点である。若者の消費行動，とりわけ，

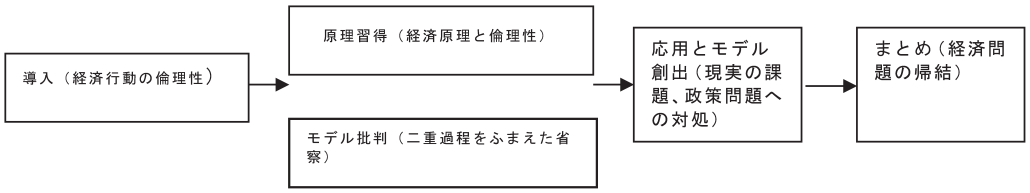

図 5　経済倫理モデル習得からモデル創出に至る 4 段階のプロセス（筆者構成）

音楽配信による構造変化に伴うミュージシャンとオーディエンスの「ライブ」重視から引き起こされてきたともいえるコンサートチケット転売問題などがそれである。その原因や帰趨は別として，その中にある古典的な需要供給問題は，効率性と不公平（経済性における時間と費用）を勘案させる上で基礎となる問題である。第三に，社会科の基本である「身近な事例」からの帰納的構成・演繹的構成である。米国の経済事例は，演繹的構成であり，原理や概念そのものから構成するために「架空の事例」が多くなる。これ自体は，経済理論や概念を学ぶ上では当然であり，複雑で夾雑物をまとった事例では，理論や概念の説明は難しくなる。一方，倫理的選択を迫る場合も，トロッコ問題など，「2 択を迫ることは出来る」が，功利主義者をやっつけるための，非現実的な選択場面（線路の上に，黙って立っているなんてことはない！そもそも，映画みたいな場面があるものか！）であり，この思考実験の後味の悪さが生徒の反応である。その点で，本開発では，映画『ポバティ・インク』（自分の寄付が，地震で傷ついたハイチの産業を破壊する）にある「寄付」という常識の相対化，ゲーミングによる「高所得者か低所得者の役割」で「累進課税，累進消費税」「寄付」を選択する主体化など，できうる限り「架空」から「現実ないし現実に近い」（映像がどんなにアクチュアルであっても，生徒にとってハイチは現実か？という批判は当然あり得る）教材を選択構成した。

3.2.3　方法構成―活動による原理習得からモデル創出へ

3.2.3.1　方法概要と一覧

方法は，アクティビティ，ゲーミング，読み物教材，映画・動画などの視聴覚教材から，アクティブ・ラーニングを試みる構成である。表 3 に示すとおりである。

3.2.3.2　展開とプロセス―経済倫理の習得対象化からモデルの創出へ

先に示した方法と内容の単元の展開とそのプロセスは，図 5 の通りである。導入単元の部分で，生徒は経済行動・経済原理の中に埋め込まれた倫理性があることを明確化する。さらに，経済での人間行動についての倫理的場面を三つの倫理学説に基づき確認する。それを受けて，第 2 単元から第 5 単元までで，経済原理と経済倫理概念の関係と 3 つの倫理学説との関連を第 1 単元を受けて習得，確認する。さらに，原理の習得と共に，経済モデルに内在する価値的側面からのモデル批判を試みる。それらを受けて，第 6 から第 9 単元で，新たなモデル創出を図る。最後に，経済問題の帰結は，倫理的多元主義による経済倫理の考察を含めて，新たな代替的モデルを主体的に創出できることを確認するのである。

おわりに

以上，倫理的多元主義による経済教育のカリキュラム構想を提示した。

筆者が断片的に発表してきた経済倫理について，山岡教授からの示唆を受けて，その答えを見いだそうとしたが，残念ながら一部の構想のみに留まった。

本稿の成果は，次の 3 点にまとめることができる。第一に，「倫理的多元主義」を基盤に，帰結主義，義務論，徳倫理に内在する正徳善に基づく具体的カリキュラム構想を示した。第二に，単元構成のプロセス，現在の喫緊の課題とされるアクティブ・ラーニングを据えたことである。これ自体は，米国流経済教育のフォロワーとしての筆者の乱雑な道具箱のアイテムに過ぎない。第三に，経済倫理モデルの創出過程を明示したことである。二重過程をふまえた省察をさせることにより，経済行動の倫理性に気づかせ，経済倫理モデルの習得，経済倫理モデルの批判，モデル創出に至る 4 段階を提示した。経済倫理的意思決定過程に二重過程をふまえた省察を設定したことも確認したい。

残された課題は，3 点ある。第一に，フィールドテストと実践化テストの未達である。第 5 単元に関して，小貫篤との共同発表（2016），第 10 単元の原初的な形式を筆者自身が試みている（猪瀬 2013）が，それらの量的質的調査，検証は不十分である。第二に，内容開発の量的質的精緻化である。フィールドテストと共に，実践による量的質的調査の下，よりいっそうの内容開発が試みられなくてはならない。

註

[1] その詳細は以下に示すとおりである。スザンヌ・ヘルバーン（Suzanne Helborn）の経済教育論「経済教育は愛を語ることができるか」（猪瀬 2004）で，多元主義経済教育の可能性について論じ，「経済教育は『在り方生き方』に答えることが出来るか？」（猪瀬 2008）では，米国経済教育学会の開発したカリキュラム教材を対象に，経済学の倫理的基盤を学ぶ論理と内容分析を試み，「年金教育の可能性 - 自立と公共性のデマケーション」（猪瀬 2009）において，経済倫理に関する正徳善の三元鼎立理論を考察した。さらに，「経済教育における自然主義的誤謬の批判的検討―功利と直観のプロブレーマ」（猪瀬 2011）で，経済教育における事実と価値の二元論批判を試みている。

[2] なお，このセッションでは，ジャセク・ブラント（Jasec Brant）らが，シティズンシップ教育論に基づく企業家教育を展開しており，同様の論難（倫理的側面を欠く経済学の論理とブレア改革路線のみに迎合しているという批判）を，ギブソンらから受けている。そのブラントが，現在では，批判的実在論に依拠して新古典派経済学を批判し，舌鋒鋭くオールタナティブな経済教育論を展開していることを思えば，戸惑うばかりである（猪瀬 2015）。

[3] キャサリン・ライアン・ハイドの小説を映画化した『ペイ・フォワード 可能の王国』（原題：Pay It Forward, 2000 年）の中心テーマ。

引用文献

猪瀬武則（2003）「経済教育は愛を語ることができるか」『日本社会科教育学会第 53 回全国研究大会発表要旨集』
―――（2005）『経済教育改革研究―経済的市民性の開発』学位請求論文，広島大学
―――（2008）「経済教育は『在り方生き方』に答えることが出来るか？」『弘前大学教育学部紀要』第 99 号，pp. 33–43.
―――（2009）「年金教育の可能性―自立と公共性のデマケーション」『経済教育』第 28 号，pp. 118–125.
―――（2011）「経済教育における自然主義的誤謬の批判的検討―功利と直観のプロブレーマ」『全国社会科教育学会研究大会要旨集』
―――（2016）「英国の批判的経済学教育論―対抗スタンダード化の動向」『経済教育』第 35 号，pp. 40–48.
―――（2017）「多元主義経済教育論中等経済教育のスタンダード化を巡る論争をふまえて」『経済教育』第 36 号，pp. 19–24.
猪瀬武則，小貫篤（2016）「倫理的多元主義による経済学習の授業構成と展開―患者と医者の情報の非対称性ゲーム―」『全国社会科教育学会第 65 回全国研究大会（兵庫教育大学）発表要旨集』
大垣昌夫（2011）「行動経済学における政策評価と無条件の愛」『行動経済学』第 4 巻，pp. 9–42.
大瀧雅之（2013）「理論経済学における『善』と『正義』：個人と社会の相互作用」『社會科學研究』第 64 巻 2 号，pp. 73–87.
児玉修（1977）「社会的判断力育成の教材構成：D. W. オリバーの公的問題について」『社会科研究』第 25 号，pp. 93–102.
中野重人（1978）「社会科と価値」『社会認識教育の探求―社会科教育学の展開』第一学習社
Berlin, I., 2013（1953）*The Hedgehog and the Fox: An Essay on Tolstoy's View of History*, 2nd edition, Princeton: Princeton University Press.

Foot, Philippa,（1977）“Virtues and Vices,” in her *Virtues and Vices and Other Essays in Moral Philosophy*, Clarendon Press, pp. 1–18.（高橋久一郎訳（2015）「美徳と悪徳」，加藤尚武・児玉聡（監訳）『徳倫理学基本論文集』勁草書房，pp. 47–71.）

Inose, T. and M. Yamaoka,（2007）*Japan-U.S. Comparison of Personal Financial Literacy: An Analysis of Results of FFFL Theme Tests for Middle School*, presented at the Seventh Conference of the International Association for Citizenship, Social and Economic Education in Estonia.

Kahneman, D.,（2011）*Thinking, Fast and Slow*, Brockman, Inc.（カーネマン，D. 村井章子（訳）.『ファスト & スロー』早川書房，2012 年）

Myrdal, G.,（1996）*An American Dilemma, Volume II The Negro Problem and Modern Democracy*（with a new introduction by Sissela Bok.），New Brunswick: Transaction（first published in 1944 by Harper and Row）。

Nussbaum, Martha C.,（1993）“Non-Relative Virtues: An Aristotelian Approach,” in Nussbaum, M. C. and A. Sen,（eds.）*The Quality of Life*, Oxford, pp. 242–269.（渡辺邦夫訳（2015）「相対的ではない徳―アリストテレス的アプローチ」，加藤尚武・児玉聡（監訳）『徳倫理学基本論文集』，勁草書房，pp. 105–149.

Putnam, Hilary,（2002）*The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and Other Essays*, Cambridge, Harvard University Press.（藤田晋吾・中村正利訳（2006）『事実/価値二分法の崩壊』法政大学出版局）

Rawls, John,（1999）*A Theory of Justice*, revised edition, Oxford University Press.（川本隆史ほか訳『正義論：改訂版』紀伊國屋書店，2010 年）

Robins, Lionel,（1935）*An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 3rd ed., Macmillan.（辻六兵衛訳（1957）『経済学の本質と意義』東洋経済新報社）

Sandel, Michael,（2012）*What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets*, Allen Lane.（鬼澤忍訳『それをお金で買いますか：市場主義の限界』早川書房，2012 年）

Saunders, P., G. L. Bach, J. D. Calderwood, W. L. Hansen, and H. Stein,（1984）*Master Curriculum Guide in Economics: A Framework for Teaching the Basic Concepts Second Edition*, Joint Council on Economic Education. 岩田年浩・山根栄次訳（1988）『経済を学ぶ・経済を教える』ミネルヴァ書房

Sen, Amartya K.,（1987）*On Ethics and Economics*, Oxford: Blackwell.（徳永澄憲・松本保美・青山治城（訳）『経済学の再生―道徳哲学への回帰』麗澤大学出版会，2002 年，徳永澄憲・松本保美・青山治城（訳）『アマルティア・セン講義　経済学と倫理学』ちくま学芸文庫，2016 年）

Sen, Amartya K.,（2008）“The Dicipline of Economics,” *Economica*, 75（300），pp. 617–628.

Stanovich, Keith. E.,（2004）*The Robot's Rebellion: Finding Meaning in the Age of Darwin*, Univeirsity of Chicago Press.（椋田直子（訳）『心は遺伝子の論理で決まるのか―二重過程モデルでみるヒトの合理性―』みすず書房，2008 年）

Wight, Jonathan and J. S. Morton,（2007）*Teaching the Ethical Foundation of Economics*, National Council on Economic Education.

Wight, Jonathan,（2015）*Ethics in Economics: An Introduction to Moral Frameworks*, Stanford University Press.

Wight, Jonathan,（2016）“The Ethical Economist: Duty and Virtue in the Scientific Process,” DeMartino, G. F., and D. N. McCloskey,（eds.）*The Oxford Handbook of Professional Economic Ethics*, Kindle version.